# 東京天台

平成二十四年
秋彼岸号

発行所
天台宗東京教区
杜多徳雄
〒107-0062 東京都港区南青山1-3-22
TEL.03-5785-3481

http://www.tendaitokyo.jp/


## 慈覚大師千百五十年ご遠忌
### ～円仁さまについて～

来年一月は、第三代天台座主・円仁が亡くなられて一一五〇年にあたることから、天台宗では数多くの遠忌法要が行われています。「慈覚大師」という大師号を清和天皇から諡られた方ですが、どのような活躍をされたのでしょうか。

慈覚大師開創　中尊寺　本堂（提供　中尊寺）

**修行と布教**

円仁は、平安時代が始まった七九四年に、現在の栃木県で生まれました。父は現在の岩舟町にある大慈寺の熱心な信者で、円仁も九歳のときに大慈寺の広智のもとで出家しています。十五歳で比叡山に登り、伝教大師最澄のもとで修行をはじめ、天台の実践行を懸命に学びました。最澄もその優秀さを誉め称えたと伝えられています。

最澄の没後、円仁は最澄が定めた十二年間にわたる修行をはじめました。しかし、人々に教えを弘めて欲しいという周囲の要請により、不本意ながら六年ほどで修行を中止し、法隆寺や四天王寺で『法華経』などの講義を行いました。また東北地方を巡拝し、数多くの寺院を建立して教えを弘めました。

しかし四十歳のころ体調を崩し、比叡山内の横川に小さな庵を建て、隠棲することになりました。ちなみにこのときが横川の開創とされています。

**中国留学**

病の癒えた円仁は、遣唐使の一行に短期留学生として抜擢されました。一年間ほどという予定であったため、あらかじめ比叡山で出ていた天台教学に関する疑問をまとめ、その回答を中国天台の中心地である天台山に求めることにしたのです。

困難を乗り越えて中国の揚州に着いた円仁は、さっそく天台山行きの許可を現地で求めましたが、短期留学であることを理由に認められませんでした。すると、揚州での勉学だけでは不十分と感じ、不法滞在になることを覚悟し、帰りの遣唐使船に乗らなかったのです。幸いに旅行の許可証を得た円仁

〈2面につづく〉

慈覚大師開山 毛越寺 浄土庭園
（作庭は、奥州藤原2代基衡公の時代）

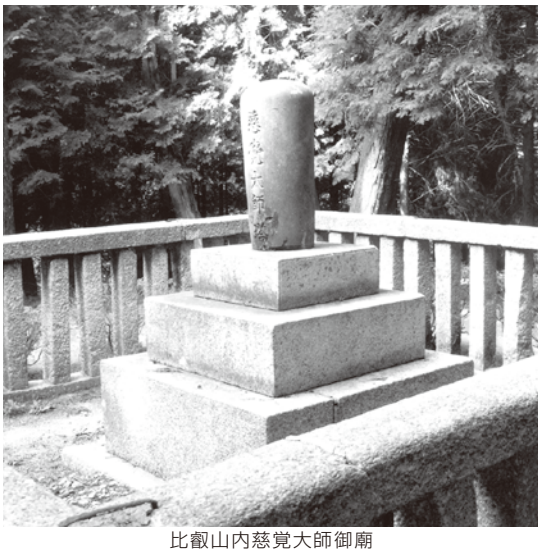
は目的地を変え、文殊菩薩の聖地とされる五台山で念仏を、都である長安で密教を精力的に学びました。

ところが、時の皇帝による仏教弾圧により、強制的に還俗の上、帰国させられることになってしまいました。足かけ十年に渡る中国滞在は、『入唐求法巡礼行記』という綿密な日記に残され、当時の事情を伝える貴重な史料となっています。

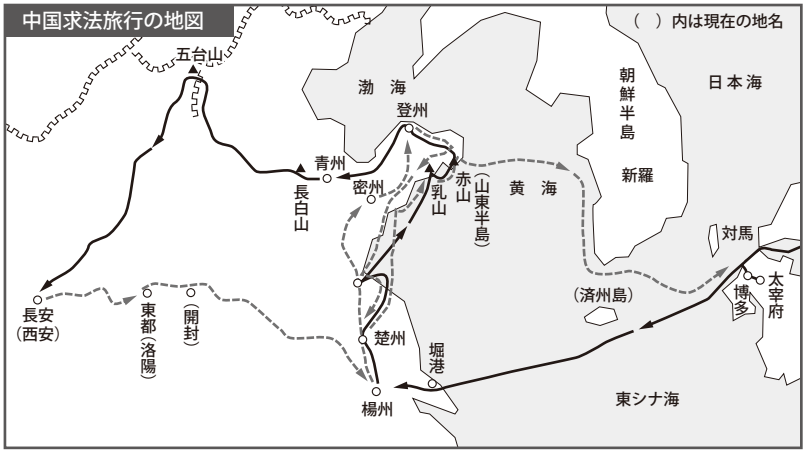
**帰国の後**

帰国後の円仁は、中国で学んだ密教について、本を著し、講義を行い、儀式を執り行うなど、後継者の育成に力を入れました。また『法華経』の理論と密教との一致、念仏の伝授による天台浄土教の創始、天台座主への就任、最澄以来の大乗戒の流布など、その功績は多岐にわたります。

八六四年一月一四日、円仁は七〇年あまりの生涯を閉じましたが、生前の活躍が評価され、没後わずか二年で「慈覚大師」の号が、同時に最澄に「伝教大師」の号が、僧侶に対する日本初の大師号として天皇から諡られました。こうして円仁は、師である最澄とともに現在も尊崇されているのです。



比叡山内慈覚大師御廟




# 一隅大会報告

六月九日、「第四十二回　一隅を照らす運動東京大会」が浅草公会堂で行われた。昨年は東日本大震災により中止となったため、二年ぶりの開催となった。

第一部では、雅楽と声明の調べや、輪王寺門跡寛永寺住職・神田秀順大僧正以下、教区寺院方による法要が厳修された。

第二部では、花園大学文学部国際禅学科教授・佐々木閑氏による、「日々是修行～現代人のための仏教」と題した講演をいただいた。

一見難しいようなお釈迦様の教えを、佐々木氏は時折ユーモアを交え、専門のインド仏教学の観点から、優しく大変わかりやすい口調でお話しされた。

なかでも、「犀の角の如くただひとり歩め」という言葉を好むという佐々木氏。「この言葉によって、お釈迦様は『ただ闇雲に何かにすがるだけでなく、自分で考える叡智や、物事の本質を見抜く力を養い、自己の心を整え、自分で道を切り開いていきなさい』と説いているのです」との解説に、聴衆は深く頷き、メモを取る姿も見られた。まさに現代人のためになる、有意義な講演であった。

**一隅運動表彰者**

長命寺　竹ノ家　代三郎　様
如意輪寺　大井　十四二三　様
徳正寺　佐藤　秀雄　様
金藏寺　川口　ます　様
燈明寺　堀口　綾子　様
寛永寺　穂刈　久米一　様
知行院　石井　淳良　様
安樂寺　飯野　彰　様
圓住院　小田川　豊　様
大圓寺　小川　廣昭　様
大圓寺　増田　守枝　様
眞覺寺　石川　静枝　様
安養寺　大久保　良直　様
大善院　町田　俊夫　様
安養院　林　佳恵　様

**募金御礼**

皆様からの善意の募金は、総額72万4149円になりました。

これを天台宗地球救援事務局に寄託いたしました。

茲に謹んでご報告と御礼を申し上げます。

# 「現代社会と仏教」

最近、ある本が爆発的な売り上げを記録しています。その名も「地獄」という三十二年前に発売された"絵本"です。子育てを題材にした漫画に登場したことをきっかけに急激に売れ始め、いまや十三万部を超え大ブームになっているそうです。何故昔の絵本が、今になってそんなに売れているのでしょうか？

それは子供のしつけや教育にこの絵本が一役かっているからだというのです。地獄絵の恐ろしさもさることながら、閻魔大王の裁きを受け、犯した罪により罰を受け苦しむ人間の様子がリアルに描かれている内容に、初めは騒いでいた子も読み進めるにつれお行儀良くなり、最後には「嘘はよくない」「悪いことはしない」「お友達にいじわるしない」となるそうです。

ルールやマナーを守らない行動に対して何らかのペナルティが与えられるのは社会では当然のことです。しかし近年「バレなければいい」といった人が増えたのでしょうか、モラルの低下が叫ばれています。最近では、生活保護の不正受給が大きな問題となりました。新名所として開業したスカイツリーの近辺では、ところかまわずゴミを捨てたり、周りの迷惑を考えず道路に寝ころんで写真を撮る人や、マンションに勝手に入りこみ写真を撮る人さえいるようです。

善因善果（善を行えば善い結果が返る）・悪因悪果（悪を行えば悪い結果が返る）・自因自果（自分の行いの報いは自分に返る）という仏教の因果応報の教えは、「嘘をつくと閻魔様に舌を抜かれる」「誰が見ていなくてもお天道様が見ている」「バチが当たる」といった倫理観を、日本人の心に深く刻み込んできたはずです。

地獄絵図を見せ、恐怖心を植え付けて子供をしつけることに抵抗を感じる人もいるでしょう。しかし筆者が子供の頃には、幽霊や闇（やみ）、地獄、自然の脅威等を人間の力の及ばない畏れの対象として、人間の驕（おご）りを戒め、自然や神仏、ご先祖様に感謝し、生命を敬い大切にすることを周りの大人が教えてくれたように思います。

もしかするとこの絵本は、それらを忘れかけている大人の為の絵本なのかもしれませんね・・・。

# 仏教豆知識 ③『輪袈裟（わげさ）』

袈裟には、様々な形のものがあります。宗派による違いのほかに、法要の内容等によっても違う袈裟を身につけることがあります。また、同じ形状の袈裟でも、色や模様の違い等もあります。今回は、そんな袈裟の中でも天台宗の輪袈裟についてご紹介しましょう。

四国八十八カ所巡りで、お遍路さんが身につけているのが輪袈裟です。僧侶の輪袈裟の半分の長さのもので半袈裟ともいわれますが、一般に、出家していない場合はこの半袈裟を使います。

僧侶が輪袈裟を身につけるのは、道服という墨染の道中衣を着用する場合が一般的ですが、場合によっては洋服の上に身につけることもあります。食事、お手洗いなどの際には外し、決して直接床などには置かないものです。

さて、この輪袈裟ですが、前出の慈覚大師円仁に由来するといわれております。円仁が中国で仏教弾圧にさらされた際に、僧侶は還俗（げんぞく）を強いられました。しかし、自分は出家の身であり、還俗して袈裟を外すわけにはいかないと悩んだ末に、大きな袈裟を小さく折りたたみ輪にして首から掛けたのです。おかげで円仁は僧侶であり続けながら、命からがら帰国する事ができました。

輪袈裟はこのような苦難の中から起こり、現在に伝わっているものです。身につける際は円仁の苦難に思いをはせ、粗末に扱うことのないよう心がけましょう。

# 天台の寺めぐり ㉞
## 四つ木・新小岩・平井周辺

### 西光寺

四ツ木駅近くの商店街の一角にある当寺の開創は嘉祿元年（1225）、開基は葛西三郎清重という鎌倉時代初期の武士である。関東遊行中の親鸞聖人を居館に迎えた清重が、雨を避けるため五十日間にわたった聖人滞在中に弟子となって西光坊定連と改名、居館内に堂を建て雨降山西光寺と号したことが始まりと伝えられる。以来浄土真宗の寺として栄えた当寺は度重なる戦火で衰退するも、1640年頃に天台宗僧侶の尽力により浅草寺末寺として復興、今に至る。小説『鬼平犯科帳』にも寺名が登場する当寺には、境外の清重古墳（清重塚）への参拝や、親鸞聖人・清重ゆかりの文化財拝観に歴史愛好者が訪れるだけでなく、一般の方も入場可能な会館での写経・休息や声明公演・大般若転読法要に地域の方々も訪れ、多くの人々に親しまれている。

西光寺 本堂

### 徳正寺

中川堤防沿いの道からほど近くにある当寺は、永正十年（1513）浅草寺末寺として現在の墨田区押上に創建され、来年には開創500年を迎える。開基は不明だが、存慶法印が当寺を中興、宝暦年間（1751～1763）には本堂や観音堂などの諸堂が建ち並び、近世江戸観音第三十二番札所があったと伝えられている。関東大震災では大きな被害を受け、その後区画整理によって昭和二年に現在の新小岩の地に移ったが、本尊阿弥陀如来像は震災や戦火を逃れて今日も参拝者の信仰を集めている。境内では徳正寺基行地蔵尊、押上当時からの徳正稲荷のほか、震災で焼け残ったお地蔵様や空襲を受けた墓石などを拝むことができる。毎年十一月には厄除護摩が修され、大勢の参拝者でにぎわう。

徳正寺 本尊 阿弥陀如来像

### 東漸寺

当寺は、文安元年（1444）に秀尊法印が開基、寛永年間（1624～1643）に円覺上人が中興したと伝えられる。本堂は戦後改築されたが、庫裏は大正五年の木造建築で、客殿・西洋館は大正建築の様相を残している。本尊は阿弥陀三尊で、他に薬師如来、釈迦如来等の諸尊や葛西三十三観音札所の千手観音、聖観音を奉安している。境内には、徳川家康公の侍医板坂如春の墓碑、如春の業績が刻まれた板坂卜斎如春叟碑銘、青面金剛像を刻んだ庚申塔があり、いずれも墨田区登録文化財に指定されている。中でも庚申塔は、側面に「右市川道、左やくし道」と刻まれた木下川薬師への道標を兼ねた珍しいものである。飛び地には、弘法大師の祠や北向地蔵堂があり、毎年六月二十四日には北向地蔵講が催される。

東漸寺 本尊 阿弥陀如来像